

一、本書は、Jules Michélet『Histoire de France』のなかの「中世編」を全訳し六巻に分けたうちの第四卷である。翻訳には一九八一年にRobert Laffont社から出版された一卷本『Le Moyen Age』を用いたがFlammarionの全集本（一九七四年刊）も参照した。本巻冒頭に掲載した「一八四〇年の序文」は、ミシュレが一八四〇年、本巻と同じ部分である七・八・九部を原書の第四卷として刊行した際に書かれたものをFlammarion版全集から訳出したものである。

一、各章のタイトルは、原書ではタイトルというより扱っている人物名や事件名が並べられたもので訳者が内容的に要約して付けた。これは本巻だけでなく、既刊の三巻も含め全巻についても同じである。

一、登場する人物の呼称について、原書はたとえば「ブルゴーニュ公」「ランカスター公」「ヨーク公」としか記していないケースが多いが人名として見た場合、これらは厳密に言えば職責名なので本訳書では必要所に「フィリップ豪胆公」「ジャン無畏公」などと補足した。

一、人名の表記は、巻末に付けた索引にはミシュレの原書に用いられている欧文表記を付したが、本文中では、その人の生きた現地での呼び方をカナで表記した。

一、なお、本書の記述のなかでは、一七〇七年のイングランド王国とスコットランド王国の合併以前であるにもかかわらず、「イギリス」や「英軍」という呼称を「イングランド」と混在する形で用いた。その理由は、フランスを侵略したイングランド軍はウェールズ人やアイルランド人も含んでいたためで、どちらかというところ、そのイギリスのなかでアイルランドやスコットランドと対立的に表現する場合に限って、「イングランド」という呼称を用いた。

目次

一八四〇年の序文 2

第七部 狂王シャルル六世 5

第一章 シャルル六世の若き日（一三八〇～一三八三年） 6

第二章 シャルル六世の青年期（一三八四～一三九一年） 30

第三章 シャルル六世の狂気（一三九二～一四〇〇年） 53

第八部 フランスの分裂 83

第一章 オルレアン公とブルゴーニュ公（一四〇〇～一四〇七年） 84

第二章 カボシヤンの乱（一四〇八～一四一四年） 137

第三章 国家と教会の改革の試み（一四一三～一四一五年） 187

第九部 百年戦争の再開 239

第一章 アザンクールの戦い（一四一五年） 240

第二章 蹂躪されるフランス（一四一六～一四二二年） 282

第三章 ヘンリー、シャルル両王の死（一四一四～一四三二年） 321

訳者あとがき 366

人名索引 378

一八四〇年の序文

ジュール・ミシュレ

この第四巻と第六巻〔訳注・ミシュレの原著では、第一部と第二部が第一巻、第三部と第四部が第二巻、第五部と第六部が第三巻、第七部から第九部が第四巻、第十部から第十二部が第五巻、第十三部から第十七部が第六巻になっている〕は、フランスが深傷を負った十五世紀の大きな危機をテーマとしている。この危機には、フランスがあやうく死に至らんとした下降局面と、ついで、復活し上昇する局面の二つがある。前者は、法王庁の分裂をきっかけに、オルレアン党とブルゴーニュ党、ヴァロワ家とランカスター家の対立による政治的分裂へと連鎖し、ほぼ半世紀つづいた。

十四世紀フランスの国家統一の弱点は王権にあり、十五世紀には王権が二分したので、国民は、なんとかしてこの亀裂を埋めようと努力しなげなかつた。この亀裂を埋めようとした都市住民の試みは一四一三年に失敗するが、この努力から唯一遺つたのが一つの法典〔訳注・『カボシユの勅令』〕で、これが、フランスにとって最初の行政法となる。このとき都市の英知が果たし得な

かつたものを、直観的ひらめきによつて実現したのが田園の人々で、この生氣と力によつて王権は立ち直つて国家的統一を回復し、まだ漠然としているが《祖国 *Patrie*》の理念が現れるのである。

だが、そこにいたるまでは、この国はおそらくそれ以前もそれ以後も考えられもしなかつた崩壊と死滅寸前の深みに落ち込まなければならぬ。この何世紀かの歴史を学び、よりよく理解するために、その暗澹たる時代の惨めさのなかに身を置き、追体験しようと思つても、せいぜいできるのは、その恐ろしさをわずかに垣間見ることぐらいであらう。

その歴史の重みは、この時代のモニュメントから引き出される権威のまったく新しい性格によつても減じるわけではないが、おそらく、歴史は、初めて確固たる大地を歩むようになる。年代記は、それまでは、幼稚で物語적であつたのが、一つの真摯な証言として提示されるようになる。しかし、そうした証言とは別に、わたしたちは、もつと別のものを目にするようになる。印刷によるにせよ、手書きによるにせよ、公的証書や記録文書、法令集などが、よりどころとして現れてくるのである。

こうした文書類は、これ以後、欠落も少なくななり、それらをつなぎ合わせることによつて本物の年譜、編年史 (*annals*) となり、それを基準にすることによつて、出来事の年月を確定したり、欠落を埋めたり、ときには、年代記者たちが「*on dit*」(一説によると)と記していることを否認することもできるようになる。文書に書かれているからといつて無条件に信用するのではなく、もつと重要な記録を参照し、ときには、文字で書かれているが適用されなかつた法令もあるので、そうした公的・国家的証言は個人的証言よりも根拠として薄弱であることもありうるのである。

フランスの歴代王の勅令や『Trésor des Chartes』（王室文書保管庫）、『Régistres de Parlement』（高等法院記録簿）、『Les actes des Conciles』（公会議事録）などが、重要な事実を確認するための最重要資料となる。これには、さらに、たとえばイングランドについては、『Recueil de Rymer』（訳注・ライマーは一六九二年に任命された英国修史官）、『Recueil des Statuts du royaume』（イングランド王国法令集）が加わるであろう。これらの文書は、とくに本巻〔原書第四卷〕の終わりごろにおいて、年代記者たちが明らかにしていない歴史を明確にするうえで重要性を示すであろう。

そうした文書は、時代がくだるにつれてますます増えるから、それらを調べ、解釈し、年代記を照合し点検することが必要となる。それには、準備作業が必要であり、暗中模索を避けられず、批判的議論が欠かせないが、そうしたことは読者諸兄には手に余るであろうし、「歴史」は学問的成果であるとともに芸術作品でもあるから、建物が完成したあとは、その建設に使われた機械や足場は撤去されるように、省かれることとなるう。

わたしたちは、かりに、この著作のこのあとの諸巻が、遅々として進まなかったとしても、そのことで弁明しなければならぬとは思わないし、また適当に要約本の形で終わることもありえない。それでは、重要な多くの事実を闇の中に遺し、近代の歴史学が、その豊かさや確実性を負っている新しい要素を排除することになってしまうからである。

一八四〇年二月八日

第七部 狂王シャルル六世

人名索引

※欧文表記は原著に従った。

【ア行】

- アヴェロエス Averroès 48
アキレウス Achille 271
アニエス・ソレル Agnès Sorel 122
アベラール Abailard 235
アベル Abel 74, 89, 142
アラン (パリの肉屋のおやじ) Alain 198
アランソン公 (ジャン) Alençon, duc d' 267, 271, 273
アラン・ブランシャール Alain Blanchard 299, 305
アリストテレス Aristote 48, 226
アルクール伯 Harcourt, duc d' 341
アルチュール (リシュモン伯) Arthur 275
アルテフェルデ (フィリップ・ファン) Artevelde, Philippe Van 24, 25, 92
アルテフェルデ (ヤコブ・ファン) Artevelde, Jacquemart 24
アルノー・ド・ヴィルヌーヴ Arnauld de Villeneuve 50
アルノー・ド・コルビー Arnaud de Corbie 215
アルフォンソ (寛大王) Alphonse le Magnanime 307
アルブレ (伯、元帥) Albret 100, 111, 161, 177, 258, 260, 263, 273
アルベルトゥス・マグヌス Albert Grand 194
アルマニャック伯 (ベルナル七世) comte de Armagnac 111, 163, 165, 172, 177, 179, 181, 183, 225, 282-291, 295, 332, 338
アレクサンデル五世 Alexandre 164, 233
アレクサンドロス Alexandre 70, 226
アンジュー公 (ラディスラス) Anjou, duc d' 163, 283
アントワヌ・ド・クラオン Antoine de Craon 168
アンリ・ド・マルル Henri de Marle 215, 273
アンリ四世 Henri 172, 174, 313
イザベル (アンジューの) Isabelle 298
イザベル (ヘンリー二世の妃。シャルル・ドルレアンと再婚) Isabeau de France 65, 97, 103, 141, 246, 352
イザベル・ド・ポルトガル Isabelle de Portugal 99

ジュール・ミシュレ (Jules Michelet)

フランス革命末期の1798年8月にパリで生まれ、父親の印刷業を手伝いながら、まだ中世の面影を色濃く残すパリで育ち勉学に励んだ。1827年、高等師範の歴史学教授。1831年、国立古文書館の部長、1838年からコレージュ・ド・フランス教授。復古的王制やナポレオン三世の帝政下、抑圧を受けながら人民を主役とする立場を貫いた。1874年2月没。

桐村泰次 (きりむら・やすじ)

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒 (社会学科)。欧米知識人らとの対話をまとめた『西欧との対話』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ『中世西欧文明』、ピエール・グリマル『ローマ文明』、フランソワ・シャムー『ギリシア文明』、『ヘレニズム文明』、ジャン・ドリュモール『ルネサンス文明』、ヴァディム&ダニエル・エリセーエフ『日本文明』、ジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』、アンドレ・モロワ『ドイツ史』、ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』、フェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティ I・II』、ミシェル・ソ他『中世フランスの文化』、ジュール・ミシュレ『フランス史』[中世] (I～III) (以上、論創社) がある。

フランス史 [中世] IV

HISTOIRE DE FRANCE: LE MOYEN AGE

2017年6月10日 初版第1刷印刷

2017年6月20日 初版第1刷発行

著者 ジュール・ミシュレ

訳者 桐村泰次

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1620-3 ©2017 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。